

ワルボロ

2007(平成19)年8月6日鑑賞(東映試写室)

★★★



監督＝隅田靖／原作＝ゲッツ板谷『ワルボロ』（幻冬舎刊）／出演＝松田翔太／新垣結衣／福士誠治／木村了／城田優／古畑勝隆／途中慎吾／仲村トオル／ピエール瀧／高部あい／戸田恵子／温水洋一（東映配給／2007年日本映画／109分）

……今の日本では不良も低年齢化が進行中……？ ある日突然、優等生からワルくてボロい不良に変身した主人公は、最悪のまち、立川市の錦町の中学3年生。「七人の侍」ならぬ6人のワルボロは、一体何のためにツッパリ、ヤクザまがいの抗争劇を展開するの……？ それがこの映画のテーマ。そしてその答えは、「仲間」を欲していた中学3年生頃の気分に戻れば、きっと見えてくるはずだが……？

ワルボロに何の意義が……？

この映画のタイトル『ワルボロ』とは、その言葉どおり「ワルくてボロい」ということ。つまりこの映画は、10代の頃暴走族やヤクザ予備軍として忙しかったという原作者のゲッツ板谷氏の体験を踏まえた、「ワルくてボロい」青春グラフィティーというわけだ。

主人公は立川第3中学3年生のコーちゃん（松田翔太）。彼はそれまで勉強一筋だったにもかかわらず、ある日幼なじみで今や「三中錦組」のトップとなっているヤッコ（福士誠治）と大ゲンカしたことによって何か弾けたらしい……。その結果、卒業を約半年後に控えた中学3年生の夏休み前に至って、それまでの優等生から突然不良に大変身！

たしかに、中学3年生の時代においては、「右にならえ」方式で上から押しつけられながら勉強するよりも、仲間と一緒にバカをやっている方が満足度が高く、充足感があることは当然だが、そうかといって「ワルボロ」に何の意義が……？

不良の存在価値は……？

オールバック、ソリ込み、短ラン、ボンタンそしてカバンの中には鉄板というのが、中3レベルでの不良の基本スタイルらしい……？ 私は不良については、単に勉強についていけず、ちょっと悪いことをやりながらカッコばかりつけているだけというマイナスイメージしか持っていなかった。しかしこの映画はそうではなく、不良というものに対して、それなりの存在価値を与えているよう……？ ヤクザだって昔は任侠道を貫く「侠客」であり、「強きをくじき、弱きを助ける」という立派な存在価値があったはずだが、今のヤクザは窃盗、恐喝、賭博、覚醒剤、売春等々、儲けられることなら違法行為何でもオーケーという体たらく……？

どこの国でも、どんな社会でも自衛組織が存在するのは必然だが、それはいわゆるシマつまり自分たちの地域的・人間的コミュニティを他の侵略から防衛するため。しかし、立川市に合計10校あるという中学校の間に、お互いのシマ（中学校）を守らなければならないというそんな必要性がホントに存在するの……？ たとえば、A中の真面目な生徒たちがB中の不良たちからいじめられたり、カツアゲされたりして困っているというのであれば、A中にもA中のシマを守るための自衛団としての不良軍団が必要だが、もしそんな実態がないのなら、そもそも各中学校にある不良軍団には何の存在価値もないのでは……？

君はミミ萩原を知っているか……？

この映画には一瞬私も1度直にその姿を見たことがある一世を風靡した美人プロレスラー、ミミ萩原のポスターが登場するから、今でも彼女を覚えている人はお楽しみに……？ そしてこのポスターを見れば、この映画が1980年代の日本を舞台としたものであることがすぐにわかるはず……。

もっとも、ミミ萩原の勇姿を拝めるのはホンの一瞬だけで、その後はその「お宝」は、立川市における10の中学校の勢力分布図を示すための裏紙として使われる羽目に……。これでは、本来彼女のファンは怒るはずだが、この演出はひょっとして、1964年生まれ原作者ゲッツ板谷氏と1959年生まれの隅田靖監督が2人とも大のミミ萩原ファンであり、そのオマージュとしてこんなシーンにしたのかも……？

なぜ6人？ 7人の方が……？

突然優等生から不良に変身しようとしても、カッコだけはすぐにつけることができても、ケンカの腕前や度胸の据え方は一朝一夕では到底ムリ……？

もっとも、それまでの三中錦組は、①ドーンと構えるトップのヤッコの他、②頭の回転が速くいつもの確に動くキャーム（木村了）、③とにかくデカイが小心者の小佐野（城田優）、④滅法弱いがヤッコをとにかく慕うピデチャン（古畑勝隆）、⑤知ったかぶりだが何事にも中途半端なカッチン（途中慎吾）の5人だけ、という超弱小軍団。したがって、他の中学校の不良軍団に比べれば、大きく劣っている組織。

そんな三中錦組の中に今日からコーちゃんも仲間入りしたわけだが、これで三中錦組は総数6名。ただ1つだけある朝鮮人学校を含めた各中学校の競い合い（？）が以下スクリーン上で展開されるわけだが、私にはどうもこの6人というのが数字上ピンとこない。黒澤明監督の『七人の侍』（54年）を持ち出すまでもなく、7人の方が取りまがいがいいことは常識。それなのになぜ、原作者のゲッツ板谷氏や隅田監督は、三中錦組をコーちゃんを入れて総数7人にしなかったのだろうか……？

日本の不良 vs. 韓国の不良……？

『マルチュク青春通り』（04年）が日本で大ヒットしたのは、主演のクォン・サンウのカッコ良さもあるが、やはりそのストーリーが受け入れられたため（『シネマルーム8』35頁参照）……？ また、韓国の学園モノ映画『マイ・ボス マイ・ヒーロー』（01年）が2006年の夏日本のテレビドラマとして放映されたのは、やはりその面白いストーリー性に目がつけられたため（『シネマルーム8』23頁参照）……？

それはよくわからないが、韓国の学園モノ映画そして不良モノ映画における生徒たちのケンカの腕前は、テコンドーや飛び蹴りなどを含めて、明らかに日本の生徒たちより数段上……。そしてこれは、徴兵制度がある国とない国の違いであることは明らか……？

また、韓国の1970年代、80年代の学園モノ映画を見ていると、そこには朴正熙パク・チョンヒ政権の独裁政治や軍事教官による軍隊式教育への反発など、若者らしい反発・反骨精神の現れに共感することができる。しかしそれに比べると、日本の不良たちの軟弱ぶりは……？

ヒロインの役割は……？

プレスシートには、主演の松田翔太とヒロインの山田（新垣結衣）の2人の写真が大きく載っているが、山田がスクリーン上に登場するのはごくわずかだし、セリフもホントに少ないもの。もっとも、美少女ではあっても、人より余計に勉強することによって早く立川市から脱出したいと考えているだけのヒロインであれば、少し面白味に欠ける気がしないではない……？ 主人公コーちゃんの変身ぶりと対比すれば余計にそう思いながらスクリーンを観ていたのだが、実はそれだけではないところがこの映画のミソ……？

その名前からわかるとおり、沖縄出身で1988年生まれの新垣結衣は、テレビドラマで大活躍し、「ポッキー」のコマーシャルで大人気とのことだが、映画出演は本作がはじめて。セーラー服姿オンリーで、いつもツンツンしているだけの役柄の本作はいわば肩慣らし程度だろうが、それでも1つだけシリアスな告白をするシーンがある。しっかりとその印象を刻みつけたうえで、彼女の次期主演作に期待しよう。

2人の脇役がいい味付けを……

この映画は中学3年生の青春グラフィティーだが、そこにいい味付けをしている2人の脇役がいる。その1人が、コーちゃんの叔父さんにあたる超武闘派ヤクザを演ずる仲村トオル。彼は甥っ子が不良の仲間入りをしたと聞いて、何とホンモノのチャカ（拳銃）をプレゼントするのだが、それによって物語はどんな展開を……？

もう1人は自分の実の兄弟であるこのヤクザを徹底的に嫌い、コーちゃんに絶対近づけまいと必死になっているヒステリックなおかん役の戸田恵子。父親と共に一生懸命働いている姿を見せれば息子は順調に育ち、ホントの一人前の男になるためには勉強して学力をつけることが大切なことに気づくはずだと、彼女は信じていたのだが……？

去る7月29日の参議院選挙で安倍自民党が大敗したため、教育再生会議の答申に対する興味が薄れてしまったが、この叔父と母親を対比しながら、コーちゃんの生き方の選択について議論することは十分意味があるのでは……？



©2007『ワルボロ』製作委員会

キーワードは仲間だが……？

考えてみれば、私が中学3年生の時の最大のヒットソングが舟木一夫の『高校三年生』。この曲には「クラス仲間はいつまでも……」という歌詞があるが、『高校三年生』に続く『修学旅行』や『仲間たち』そして『君たちがいて僕がいた』などの曲のテーマはすべて「仲間」。このことから端的にわかるように、中学・高校生たちの最大の関心事は、単なる友人・友達を超えた仲間ということ……？

『ワルボロ』の主人公コーちゃんは、ヤッコと大ゲンカをした時なぜ急に弾けたのか……？ また、高部あい演ずる聖子ちゃんカットの女子中学生に心惹かれながらも、やはり隣の席に座る美少女山田のことをずっと求めていたのはなぜ……？ そんな疑問を解消したのが、コーちゃんが自分自身でもわからなかった仲間という言葉。そう、コーちゃんはたとえ不良仲間であっても、ずっと仲間を求めていたということにはじめて気づいたのだ。

そんなわけで、この映画のキーワードは仲間。さてそれを、若者のあなたはあるいは団塊世代のあなたは、どう理解する……？

迷わないのはホントにいいこと……？

この映画におけるコーちゃんの名セリフは、「俺はもう1ミリだって迷わない」というもの。立川市にある10の中学校の覇権争いの帰趨が見えてくる中、ブレないのはリーダーのヤッコだけで、コーちゃんを含む他の5人は、当然ながら戦々恐々の日々を……？

しかしある日、自分の気持の整理が付き吹っ切れたコーちゃんは、いわば清朝時代の中国がイギリス帝国主義に抵抗したように、あるいはフセインのイラクがアメリカ帝国主義に抵抗したように、覇権を握ろうとしている某中学校の某リーダーに対して猛然と対抗することを宣言。それがこのセリフとなって表れたわけだが、その結果コーちゃんは一体どんなバカげた行動を……？

結果的に大惨事にならなかったから良かったものの、あまりヘンな方向に思い詰めたうえ、「俺はもう1ミリだって迷わない」などと全然迷わないのは、ホントにいいこと……？

明らかに禁煙の風潮に逆行……？

喫煙の害があちこちから指摘されタバコ業界は大変だが、昨今それに輪をかけたのが、スクリーン上から喫煙のシーンをすべて追放しようという動き。そうなると、あの名作『ティファニーで朝食を』（61年）における、オードリー・ヘップバーンが長いキセルでタバコを吸っているシーンも2度と見られなくなるかも……？

そんな昨今の、映画と喫煙をめぐる大きな問題点があるにもかかわらず、『ワルボロ』では中学3年生のコーちゃんやヤッコたちの喫煙シーンが多いこと、多いこと……。彼らがスクリーン上に登場するたびにタバコを吸っていると言っても過言ではないほど、タバコは絶対に手離せない必需品……？

この映画では、エンドロールの中で「未成年者の喫煙を容認するものではありません」という字幕が流れるが、今ドキの若い奴らは物語が終わるとすぐに席を立ち、エンドロールを読んでいる奴はほとんどいないはず……。したがって、いくらエンドロールで「弁解」しても、この映画が禁煙の風潮に逆行していることは明らか。それを、長編映画初監督となった隅田監督はどのように弁解するのだろうか……？

2007(平成19)年8月7日記